

知的障害者の余暇生活に関する研究  
- 知的障害者通所授産施設の事例分析から -

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター

知的障害者の余暇についてその現状と課題を中心に焦点化しつつ、通所授産施設の利用者や家族への聞き取りを通して事例分析を行った。また、彼らの施設内における休憩時の行動観察を実施し発達検査の結果等からも、あわせて検討を加えていった。更にそこから、彼らへの地域生活支援について、余暇支援の観点からの考察を試みた。このようにして本研究では、通所授産施設を利用する知的障害者の事例分析を通して、彼らの余暇生活の実態を明らかにするとともに、彼らへの余暇支援のあり方を検討する上での課題や観念の整理を試みた。

ところで知的障害者の生活を地域で支えるという考えは、社会福祉基礎構造改革や新しい障害者プランの中でもすでに明らかである。このことは2003年度からの、利用契約に基づく支援費制度においても同様である。今後はこの地域福祉の理念が、より強く反映されてくることと思われる。ではそこで、彼らの地域生活支援のあり方を検討する際、我々が注目しなければならない点は何であろうか。おそらく地域生活援助事業（例えばグループホームの活用）などにみられる、住みなれた地域での生活が可能となるような福祉サービスの展開であろう。だが知的障害者の生活が、より豊かで生きがいのあるものに発展していくためには、余暇生活の充実が欠かせない要素となるのではないだろうか。そこで、通所授産施設に通う利用者の事例分析を通して、施設実践の課題を加味した、知的障害者の余暇生活に関する考察を加えていきたいと考えた。そのために本研究では主に8事例を対象にして事例分析を行い、彼らの余暇やそれに関連した育ち、発達障害、そして休み時間の過ごし方等を調査・観察することで、今後の知的障害者への余暇支援を検討し実践する際の一助になればと考えた。

具体的な方法としては、S市内の知的障害者通所授産施設の利用者を研究の対象事例とした。そして本人や家族への聞き取り調査を中心に、Aグループとして8名の事例を、余暇生活の観点から整理していった。またBグループとして1つの作業グループを抽出し、のべ51日間に16名の休憩時間の行動を観察した。また一部新版K式発達検査を実施し、生育歴や家族の状況等に加えて、対象者の発達や障害の状況を事例分析の中であわせて検討していった。

結果と考察については、聞き取り調査を中心とした事例分析から、各事例によって違いはあるものの、それぞれが自分なりの余暇のパターンを持っていることが見受けられた。また、ガイドヘルプ等の支援が有効であることを示唆するような事例がある一方、結果的に一人で過ごす時間の多い事例もあった。更に休憩時の行動観察から、作業時間の場所を離れて過ごす行動とその時の対人関係の有無等について分析を行った。そこからは、両者がある程度比例しているのではないか、という関係が結果としてみられた。また個別事例の検討として、緊急時の地域生活支援から始まり、徐々に余暇の充実が図られていった事例を取り上げた。その事例では親が亡くなった後、そのまま地域で様々な支援を受けつつも、十年余り一人暮らしを実現している。知的障害があっても、本人が自分の生活に自信を持つということが、どのようなパワーにつながっていくのか。そして自分なりに、どんな余暇生活を創りあげることができるのか。この事例を通して、そのようなことを考察していくことができればと考えた。

総合考察では、大きく次の三点にまとめられた。まず一点目は、知的障害者への余暇支援を含めた地域生活支援を考える際、「見守り」が重要なキーワードになるのではないかとということ。つまり適切な「見守り」が、彼らの余暇への主体性を維持していくのではないかとということである。そして二点目は、彼らの対人関係を見る際、その「人との関係」がどのようになっているかとということ。つまりその関係の質や、援助の観念が重要ではないかとということである。また三点目として、彼らが自分自身の余暇の過ごし方に関して、どれくらい自己決定に基づいたものになっているかとということ。つまり育ちの中で形作られてきた彼らの自己決定の幅または枠が、彼らにとってどのようなものであるかとということである。以上の三点を中心に、総合考察において検討を試みた。